

こころの玉手箱

公明党代表

太田 昭宏

3

京都の山科の坂道を測量、機器を担いで上り下りしたことがある。京大時代はいろいろなアルバイトをしたが、工学部土木工学科で学んだ知識が生かせる測量は結構、実入りがよかった。

昔、街中できるとき見かけた機器だが、名前までご存じだろうか。後ろ側の機器が望遠鏡を使って二つの目標の角度を測る「トランシット」。手前は方向を測る「平板」だ。

もちろんバイト目当てに工学部を選んだわけではない。入学した一九六四年は東京五輪の年で、高度経済成長の真っただ中。高速道路

路、橋、新幹線が次々とできていたところだ。自分の手で新しい日本を創り出した。土木という仕事に男のロマンを感じていた。

入学直後の六月、衝撃を受けた。新潟地震で完成直後の昭和大桥の橋桁が崩れ落ちたのだ。地盤が液状化したのが原因だった。

日本は地震国。やみくもに新しい建造物をつくっても壊れては意味がない。これが耐震工学を専攻する一つの機縁になった。

授業だけでなくアルバイトでもよく使った

測量機器



橋崩落に衝撃、耐震工学を学ぶ

つくった模型を揺らし、振動の伝わり方を調べたりした。卒論の題名は「土木構造物の非線型振動とその耐震性に関する基礎的研究」。修士論文は「構造物基礎の水平復元力特性に関する研究」だった。

そのころ長野県では松代群発地震が起きていた。我が研究室も調査をした。当時の仲間から耐震研究の権威が多く生まれた。

政治の道に進んだ後、五年の阪神淡路大震災、二〇〇四年の中越地震、今年の能登半島地震など地震被害が相次いだ。中越と同じ年にはスマトラ島沖で大地震が起きており、世界的にも地震の活動期を迎えている。私は常に先頭に立って対策に取り組み、地震計の整備や、小中学校などの校舎や体育館の耐震化、南海・東南海地震対策の法制化などに力を入れてきた。

多年はごつごつ地震が多い。もっとも対策に力を入れねばならないと思っている。